今日の観察ポイント

キンポウゲ科の仲間

5月3日の江部乙公園観察会では、開花中のキンポウゲ科イチリンソウ属のニリンソウや、エゾイチゲやヒメチゲ、キクザキイチゲ、アズマイチゲ等を取り上げて識別の勉強をしました。一か所で同属の種が数多くそろって観察できるのはとても珍しいもので、江部乙公園はさながら春の植物観察園と呼ぶにふさわしい環境だったと思います。一方、今回の須麻馬内川林道周辺ではなかなかそのように都合よくできておりませんが、キンポウゲ科の仲間をもう少し継続して観てゆきたいと考えます。これまで私の多少知りえた丸加山山麓に自生するキンポウゲ科の植物には、黄花のエゾノリュウキンカ、フクジュソウ、ミヤマキンポウゲ、白花のニリンソウ、アズマイチゲ、ルイヨウショウマ、カラマツソウ、サラシナショウマ、赤花のシラネアオイ、青花のトリカブト、緑花のエゾノレイジンソウ、アキカラマツなどがあります。そこで今回の観察のポイントは本日のフィールドで、現在開花しているもの、また開花はまだ先になるが蕾は出ているものなどに限定し、以下の4種を紹介してみます。また前回勉強したニリンソウやトリカブトも見ることができますので思い出してみましょう。なお余談ですが、図鑑には植物の特徴を見分けるポイントとして、茎、葉、花、実、生息環境などの順で取り上げて説明しているのが多いので、見比べるときの参考にしてください。

【エゾノリュウキンカ】　キンポウゲ科　リュウキンカ属　　別名：ヤチブキ

蝦夷立金花。キンポウゲの仲間ですが山菜としてヤチブキの名で親しまれてきました。茎は全体が無毛で太く、高さは50～80cm、株になって生えます。葉は大きな腎形をしており、葉柄は長く、縁に小さな歯があります。花は黄色で、花茎の先に4～8個つきます。5枚の花びらがあるように見えますが、これは花弁ではなくがく片と呼ばれる部分です。実は、茶褐色で１㎝程度、熟すと裂けます。生息環境は、北海道と本州北部などの谷地、湿原、高山地帯の川辺など。私事ですが去る５月 12 日、道医療大学の自然観察園を訪ねたおり、沢筋でエゾノリュウキンカの大きな群落を見ましたが、手を加えて増やしているところだというお話でした。このように今では生息域が限られるようになりつつあるらしいので、須麻馬内川流域環境の重要性を再認識しておきたいものです。

【ルイヨウショウマ】　キンポウゲ科　ルイヨウショウマ属

類葉升麻。高さは40～60cm程度で、茎の基部に鱗片をもっています。葉は互生し、3出複葉で小葉は鋸葉、先が尖ります。現在まだ蕾ですが、白花で穂先に沢山の花が集まる総状花序といわれる形をしています。新緑のころ、暗くなった林床に可憐な花を咲かせます。実は球形の液果で多数ついて、黒い色をしています。稀に赤い実を持つものがありますが、別種のアカミノルイヨウショイマです。生息環境は自然観察の森のような低山の林内です。また、ネット上にルイヨウショウマも山菜であるかのように書いた記事を見かけたことがありますが、これは間違いです。秋に咲く同じキンポウゲ科の山菜となるサラシナショウマと混同しているようなので、要注意です。

【カラマツソウ】　キンポウゲ科　カラマツソウ属

唐松草。茎は直立し、円柱形で中空、緑または紫色をしています。高さは 50～120cm、下部に葉柄、基部には托葉があり、上の方で枝分かれします。葉は互生、3 出複葉で小葉は広卵形またはくさび形、先は浅く 3 つに裂けています。この花も現在はまだ蕾状ですが、白花で茎の先に散房状につき、花弁に見えるのは雄蕊です。また萼片は開花直後に落ちてなくなります。和名の由来は花の状態がカラマツの葉に似ていることによります。　実は翼と柄をもつ痩果（小さな乾いた果実）です。生息環境は、亜高山帯から低地までの明るい場所です。

【エゾノレイジンソウ】 キンポウゲ科　トリカブト属

蝦夷伶人草。茎の高さは 1m前後、屈毛が生えています。根出葉は長い柄をもち、腎円形で大きな切れ込みがあり、葉の形はトリカブトによく似ています。花はクリーム色で茎頂の総状花序に長さ約 2. 5cmの花を多数つけ、当地での開花期は 6 月中旬以降です。名の由来は花の形を、烏帽子を被った伶人＝雅楽の奏者、のように見立てて付けたものです。実は残念ながらまだ見たことがありません。なお、生息環境は亜高山帯から山地までの林縁や林内で、須麻馬内川流域が亜高山帯の植生を有している貴重な環境であることを証明しているといえるでしょう。（写真・文:　中島和治）